

登山学校レポート（第8回 冬山シミュレーション講習）

氏名（南家弘毅）・所属会（福岡勤労者山岳会＝愛称・福岡アゼリア山の会）

日程：12/9（土）～12/10（日）

山域：阿蘇仙酔峡

パーティー編成 3人×4P

■冬山の装備とパッキング

今回の山行計画書の個人装備リストを数えてみたら、大小合わせて48あった。共同装備リストは19。後者はテントや鍋をはじめかさばるものが目立つ。共同装備をパーティーの面子の数3で割って1人7個としても、計55個の装備を担ぎ、あるいは身に付けて登ることになるのだ。

山行前夜、そんなことを考えながら個人装備のみをパッキングしたところ、65リットルのザックがパンパン。しかもずしりとくる重さ。「冬山登山は、装備をいかに軽くコンパクトにするかが肝」と助言してくれた登山学校や会の先輩たちの言葉が刺さった。

初日、仙酔峡登山口駐車場で荷分け。結局、ザックの外に括りつけねばならなくなったものは、ストック、アイゼン、ピッケル、わかん、ヘルメット、スコップ2本、個人用折り畳みマット…。8つもあるとのけぞった。山スキーで雪山を闊歩していた30数年前、外付けギアはアイゼン、ピッケル、スコップのみだったのに…。強引にくくると、新人チンドン屋みたいなひどい格好になってしまった。

◎課題 1. ザックの幅や厚みからモノが多数飛び出しているのは、行動中の体のバランスがよくないのに等しい。猛烈な風を受ければ体が煽られやすくなり、滑落リスクを高めてしまう。ザック内に収められるモノをできる限り入れ込み、スコップやマットはゴム紐などを活用してザックと密着させる作業に慣れ、雪山本番を迎えたい。

2. 今回は共同装備だけでなく個人装備も、会や会の先輩からかなり借りた。その一つにピッケルもあった。本番前に1回でも使っていた方がいいわけで、年明け後の山行に間に合わせるべく早速注文した。

3. 今回はアウターをレインウエアで済ませていたが、ポケットが小さく、テムレスを入れるとパンパンになった。また、レインウエアは滑落時にかなりよく滑ると耳にした。ハードシェルをアウトレットで購入した（ハードシェルが雪面で滑りにくいという話もないのだろう）。厳寒時、ファスナーの上げ下げをグローブのまますぐにできるよう、つまみに細いスリングを付ける作業を年内に済ませておきたい。

■アイゼン・わかんの脱着と歩行

講習初日のメインワークは、アイゼンとわかんの脱着練習だった。

私のアイゼンは、中国地方に住む大先輩が「もう年なので使わなくなったから」と送ってくださったカジタックスの12本爪・ベルト式。年季入ってるなあ、と家でしげしげ眺めていたが、登山ショップに並ぶのがワンタッチやセミワンタッチのみで、ベルト式が皆無とい

う現実に軽いショックを受けた。それでも「時代遅れの逸品なのさ」とうそぶき、冬靴とのフィット調整をして臨んだ。

冬靴をアイゼンに合わせベルトを締めるやり方は、思い出しながらできた。だが、ベルトの先端がふにゃふにゃして、グローブをはめた手だとリング通しや末端処理にえらく時間がかかった。「先端を瞬間接着剤で固めるとよい」—。オンラインでの装備講習を開いてくださったダブルT講師と、受講生LINEグループでKさんが助言してくれていたことだ。ふーんと思いつつも作業をしていなかった。登山に限ったことではないが、親切な経験者は未経験者にちょっとしたアドバイスをくれることが多い。聞き流したり作業をさぼったりすると結局損をするのだ、と痛感。また、冬山本番前にこうした訓練を1日使って、不備がないか確かめる機会には実にありがたいとも思った。

わかんの方は、1年前に1度使ったきりだったため、左右の違いやベルトのリング通しのやり方を完全に忘れていた。同じ製品を持つ受講生に教わりながら、家で一度も試し履きをしてこなかった怠慢を恥じた。

講師たちから繰り返しあったアドバイスは、アイゼンもわかんもベルトを強く締めすぎると足先の血行が悪くなり凍傷につながるから注意して、だった。締め方が緩すぎて靴から外れるのは致命的ミスながら、締めすぎない塩梅にするのは実践で経験値を増やすしかないだろう。

2日目は岩だらけの仙酔尾根でのアイゼン歩行。歩き慣れると、アイゼンの感触が昔の記憶を呼び覚ました。上ホロカメットク山～十勝岳の雪混じりの岩尾根を縦走した時は、強風でよく顔が凍傷にならなかったものだ、とか。併せて、札幌近郊の八剣山で冬山訓練中、一つ間違っていたら死んでいた怖い墜落体験も想起された。緊張したナイフリッジ（10mほど）を渡り切り、ロープを外し体の向きを変えようとした瞬間、両足のアイゼンの爪先が絡んで前につんのめり、10数m墜落した。断崖絶壁側でなく樹林帯側に落ちたこと、木の幹に腹を打ちつけただけで止まれた二つの幸運。アイゼンを履くということは、夏山に比べ危険度がとてつもなく大きい場面にきていて、安全な場所に着くまで油断は絶対禁物である。そのことを改めて意識する時間となった。

1万1千円もした新品ゲーターが、アイゼン歩行訓練後に無傷だったのが、ひそかにうれしかった。

◎課題 1. アイゼン、わかんのサイズ調整をいま一度やっておく。また、ベルトの末端を固めてグローブでも操作しやすい状態にしておくこと。

2. 歩荷訓練を何回かやり、重荷を担ぎ長い時間歩ける体力をつけておくこと。

■共同テントでの生活

初日のメニューを終え、日がそろそろ傾き始めた15時くらいからテントを設営。同じパーティーの講師2人がザックから取り出したのは、装備がほとんど入った4斗袋。夜使うバーナーや食料、シュラフなどと、朝まで使うことのないものに分けて、すぐに落ち着いた態勢となっていた。4斗袋を使っていなかった私は、ザックにいちいち手を突っ込み、「これ

何だっけ」と確かめながら、今晚の使用可能性を考えてモノの出し入れを繰り返していた。
4 斗袋入りの装備を一度に見ることで、作業が手早くなるのだと学んだ。

テント内が少し冷えてきたので、ガスバーナーをセットして点火。お湯を沸かし始めた。講師の Y さんは受講生たちの前で、かつてテント内でやけどを負った体験を硬い表情で話してくれた。鍋（か何か）を持っていた他のメンバーの不手際から、熱い湯を浴びたというのだ。ウェアを着込んだ状態でお湯がかかったら、患部周りの高温の湯をすぐにぬぐえないわけで、たいそう痛い思いをしたことだろう。当然、山行は中止に。「鍋持ちは安定した場所に置くまで絶対に手を離すな」は、テント生活で鉄則中の鉄則である。

火に絡んだ鉄則をあと二つ復習した。一つは、酸欠にならないよう換気に十分注意すること。テントのベンチレーションを必ず開けるのはもちろんだが、どか雪がテントをどんどん覆ってしまったり、湿雪がテントに積もり夜半に凍りついてしまうといった状況も、テント生地の通気性を悪くし酸欠につながりやすくなる。

もう一つは、バーナー着火時に炎が上がりすぎないように気をつけること。低温でガスがうまく気化せずつかないのは困るけれど、ガス栓を開けすぎてガスが充満した状態で着火し、万一テントが燃えてしまったら…。冬山でテントが使い物にならなくなれば、パーティー全員の命に関わる緊急事態だ。日中、雪山のラッセルで体力を奪われ岩稜歩きで緊張を強いられると、テントはオアシスに感じられるが、火関連の作業や取り扱い時は気を抜かず、みんなまで留意し安全なテント時間にしなくてはならない。

◎課題 テント内での整理整頓の仕方をシミュレーションしておくこと

□その他

雪山の危険箇所ではロープ出しをする際、岩や樹木など自然物のアンカーがない環境でも覚えておかななくてはならない確保の仕組み、スタンディングアックスビレイほか。それに、雪庇の踏み抜きによる滑落リスクがある稜線歩きで、仲間や自分の命を守るためのコンティニアンスの方式を教わった。今回は岩稜帯でのワークのためイメージがわかかなかったので、本番の雪山でいろいろな練習をしたい。